

# 道明寺

世阿弥作

前

ワキ 僧尊性

シテ 宮人

ツレ 同じく

後

シテ 白太夫

ツレ 天女

地は 河内

季は 九月

「善き光りぞと名を聞くや。く。仏の御寺なるらん。

「かやうに候ふ者は。相模の国田代と申す所に。尊性と申す者にて候。我善光寺の如来に一七日参籠申して候へば。あらたに御霊夢を蒙りて候ふ程に。是より河内の国土師寺へ参らばやと思ひ候。

「捨てゝ早。久しかりつる世の中を。く。又思ひ立つ旅衣。昨日の山を跡に見て。猶行く方は白雲

の。海も見えたる西の空。夕日隠れの霧間より。流れも是や河内なる。土師の里にも着きにけり。く。

「長月の。色も梢の秋を得て。照るや紅葉の土師の里。

「猶晴れ残る音とてや。

「松風ひとり時雨るらん。

「是に出でたる老人は。此里の名も土師寺の。仏神

に仕へ申す者なり。

二人「有難や利生はさまざま多けれども。わきて誓ひも陰高き。天満神の宮寺に。歩みを運ぶ御値遇。実に身を知れば心なき。我等が為めは頼もしや。

下歌「いざや歩みを運ばん。く。

上歌「神さぶる。松は十かへり千代の秋。く。霜を重ねて下草の。露の身ながらなへて。神に仕へ奉る。宮路久しき瑞籬の。深き誓ひは有難や。

く。

ワキ詞「如何に是なる宮人に申すべき事の候。

シテ詞「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ「是は善光寺の如来の御夢想により。遥々当寺に参りて候。寺中の人に逢ひ申し。御夢想の様を語り申したく候。

シテ「不思議なる事を承り候ふ物かな。まづ御夢想の様を此老人に御物語り候へ。某承つて寺中の人々へ

広め申し候ふべし。

ワキ「あら嬉しや候。さらば委しく申し候ふべし。寺中の人々に御広め候へ。」

シテ「心得申し候。」

ワキ「是は相模の国田代と申す所に。尊性と申す聖にて候ふが。我念仏往生の志有るにより。此度信濃の国善光寺へ参り。一七日参籠申す処に。如来御厨子の御戸を開き。香の衣に香の袈裟かけ給ひたる

老僧の。あらたなる御声にて。汝念仏往生の志誠に懇なり。然らば五畿内河内の国土師寺は。天神の御在所なり。彼所の神明を始め奉り。七社の神々を勧請申されたり。又天神は一切衆生現当二世の爲め。五部の大乘經を書き供養して埋まれたり。其軸より木榧樹の木生ひ出でたり。其木の実を取り数珠とし。念仏百万遍申さば。往生疑ひあるまじきと承つて夢覚めぬ。なんぼう有難き御夢想

候ふぞ。

シテ「かゝる有難き御事こそ候はね。やがて寺中の人々に触れ申し候ふべし。まづ唯今仰せられ候ふ木櫨樹を見せ申し候ふべし。此方へ御出で候へ。

ワキ「さらばやがて御供申し候ふべし。

シテ「是に神明を始め奉り。七社の神々をいはひ申され候。又此方なるは天神にて御座候。あれに見えたるこそ。唯今御物語り候ふ木櫨樹にて候ふよ

くく御拝み候へ。

ワキ詞「有難や神も仏も同一体とは申せども。天神同意の御結縁今始めて承り候。

ツレ「うたての聖の仰せやな。今に始めぬ天神の。弥陀一体の御値遇。天神と申すに其御本地。救世観音にてましまさずや。

ワキ「実にく是は理なり。昔在靈山名法華。

シテ「今在西方名阿弥陀。

ワキ 「娑婆示現觀世音。

シテ 「三世利益同一體。

ワキ 「其外神や。

シテ 「仏とは。

地 「唯是れ水波の隔てにて。 神仏一如なる寺の名の。

道明らかに曇らぬ。 神の宮寺ぞ尊き。 有難しく。

実に神力も仏説も。 同く和光の影に来て。 拝むぞ

尊かりける。 く。

地クリ

「それ仏の昔神の今。 後五の時代に至るまで。 神も

濁世に応じ給ひて。 暫く西都に移り給ふ。

シテサシ

「如月下の五日にして。 都を出でさせ給ひつゝ。

地

「此土師の里に旅宿あつて。 様々の御神物をとゞめ。

末代値遇の御結縁。 今に絶ゆる事なし。

シテ

「かくても留まらぬ道のべの。

地

「草葉の露もしをるゝばかり。

クセ

「君が住む。 宿の梢を行くゝも。 隠るゝまでに。

帰り見ぞするとの御詠め。留こそと知るぞかたじけなき。さてもいつしかに。ならはせ給はぬ旅の空。名におふ心筑紫とて。天ざかる鄙の国に。住まはせ給ひしかば。あたりは都府楼の瓦。観音寺の鐘の声。明暮に響く折々は。都の春秋を。思し召し出でぬ時はなし。

シテ  
「家をはなれて三四月。

地  
「落つる涙は百千行。万事は皆夢の如し。よりく

彼蒼を期すといふ。其御心の至りにや。昨日は北闕に悲しみをかうぶつしたり。今日は西都に恥を清むる屍たりと。御神感あらたに。生きての恨み死しての悦び。普しや天満。陽感ぞめでたかりける。

ロシギ地  
「実に有難や草も木も。く。皆成仏の木の実まで。玉を連ぬる光りかな。

シテ  
「枯れたる木にだにも。誓ひの花は咲くぞかし。ま

してや面前木槵樹。花咲き実なる御覧ぜよ。

地 「実にや花咲き実なるなる。梢の色もあらたにて。

シテ 「法を称ふる理を。

地 「思の玉の。

シテ 「おのづから。

地 「あの梢の木の実こそ。此数珠の御法なれ。必ず授  
け申さんとて。帰ると見れば立ち留りて。我は天  
神の御使。名をば誰とか白太夫の。神と申す翁草

の。霜曇りしてけりや。霜曇りに失せにけり。(中人)

地 「久堅の。天の岩戸の神遊び。今思ひ出も面白や。

地 「舞樂の役役とりぐに。く。琵琶琴和琴笛竹

の。夜は更け行けども缶の役者。などや遅きぞ白  
太夫。急いで出でよと待ち給ふ。

後シテ 「月もかゝやく宮寺の。常の灯明々たり。

天女 「如何に白太夫の神。七社の御前に韓神催馬樂。う  
たふや缶笏拍子の。役とは知らずや白太夫。



シテ詞

「仰せは重く候へども。既に名にだに白太夫が。星霜積る老が身の。役をば免し給ふべし。」

ツレ

「いやとよ其役定まりたり。急いで役をなすべきなり。」

シテ

「さては辞すとも叶ふまじ。さて其役は。」

ツレ

「韓神催馬楽。」

シテ

「庭火の影や。」

ツレ

「朱の玉垣。」

地

「かゝやける其中に。白太夫が小忌の袖より。取るや笏拍子とうくと。打つも寄るも老の波の。雪

の白太夫が。缶の笏拍子は面白や。(衆)

シテ

「唯今かなづる舞歌の曲。」

地

「唯今かなづる舞歌の曲。七徳双調七拍子。膝を屈して仏を敬ひ。さす腕には魔縁を払ひ。をさむる手には寿福を招き。千秋楽には民を養ひ。万歳楽には命を延ぶる。法の筵を敷妙の。枕は袂。上は

尊き木樨樹の。梢に翔りて降るや一味の。雨風を  
そゝぎて枝々より。木の実を振ひ落して。彼尊性  
に与へつゝ。これこそ思の玉を貫く。数は百八煩  
悩の。数は百八煩惱を。かたどる数珠の。道明寺  
の鐘鼓に。神楽の夢は覚めにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹 著